

「女誠扇綺譚」の廃屋

— 台南土地資料からの再検討 —

一 はじめに — 共同調査の経緯

台湾南部の都市台南は、鄭成功の承天府が置かれ、清朝統治下でも長らく台湾全島を管轄する行政府の所在地だった。「府城」と言えば今でも台南のことを指す。一九二〇年夏、台湾に三ヶ月余り滞在した佐藤春夫は、この街を訪れて小説「女誠扇綺譚」の構想を得た。漢詩人「世外民」の案内で台南外港の安平を歴史散策した帰りに、市街西郊の「禿頭港」と呼ばれる古い運河地帯の「廃屋」に迷い込み、不可解な女の声に呼びかけられることから始まる物語である。結末に婢女の哀切な死を配し、台湾植民史に対する理解の深さと、固陋な身分制度に対する静かな問題提起を含む本作は、台湾でも高い評価を得ている。

一見異国情調あふれるファンタジーに見えながら、現実の台湾にはつきりした根柢を持つこの作品の特質は、舞台設定の面についても言える。例えば「私」が「世外民」とよく訪れたという酒樓の「醉仙閣」は、台南城外の永楽町三丁目（旧外宮後街・現宮後街）に実在した台湾料理の名店だったことが分かっている。この外宮後

河野龍也
蔡維鋼

街を含む城外一帯こそ、約一里西方の安平からはるばる引き込んだ運河が五本（五条港）に分岐して流れる「大西門外」であり、「禿頭港」はこの五条港のうち仏頭港の古名である。「女誠扇綺譚」は、安平と「大西門外」の運河地帯を舞台とする物語なのである。

台湾に関して数多くの紀行文を残している春夫が、なぜ台南訪問記を書かなかったのかは分からない。だが、「女誠扇綺譚」には、現実に街を歩いた者の実感にじかに訴えかける描写が随所にあり、戦前の台南在住の文芸愛好家の中に熱心な探求者の一群を生み出しに行った。台南一中教師の前嶋信次（イスラム学者）とその教え子の上原和（美術史家）、台南二高女教師の新垣宏一（作家・近代文学研究者）と、台南二中生で後に駿河台の文化学院に進んだ楊熾昌（モダンイズム詩人・筆名は水蔭萍）などである。中でも『台湾日報』紙上に三度連載を持った新垣宏一の調査は、モデル研究として徹底したもので、一九四〇年前後に台湾に残っていた関係者への取材から、春夫の台湾での生活について数多くの新事実を明らかにした。「廃屋」の特定はその白眉と言える。

さて、新垣の調査から七〇年以上を経た二〇一一年二月、河野龍

也是安平出身で当時成蹊大学博士課程在学中の蔡維鋼の同行を得て、新垣が示した「廃屋」のモデル、すなわち「台南市入船町二丁目一六三番地」の「廠仔」と呼ばれる造船所跡の現況調査を開始した。

一度目は場所の特定に至らなかったが、後日入手した一九三三年当時の地番入地図のコピー（岐阜県図書館所蔵）によって見当をつけ、二〇一二年八月二十九日の第二回調査で、現在の「台南市中西区民族路三段一七六巷」附近に「廠仔」の遺跡と目される建物三棟の現存を確認するに至った。

今回の報告はその再検証である。二〇一六年六月五・六日、台南の国立台湾文学館で開催された「台日〈文學與歌謠〉國際學術研討會」（国立台湾文学館主催、公益財団法人佐藤春夫記念会・日本歌謡学会共催、南台科技大学応用日語系運営）に関連して、「女誠扇綺譚」の舞台を巡るフィールドワークが行われたが、下村作次郎氏（天理大学）・陳慕真氏（国立台湾文学館）の尽力によるその準備過程で、「廠仔」経営者陳一族の子孫（陳信子さん）の所在が判明した。事前インタビューを行った陳慕真氏のご教示により、二〇一六年七月二三日に河野龍也と蔡維鋼の二名で改めて陳家を訪問、「廠仔」の往時の様子について興味深い談話を伺うことができた。またこれと前後して台南地政事務所で入手した一九一九年当時の土地登記簿および地籍図から、「廠仔」の建物の状況をかなり明瞭に把握できた。

一方、現地での聞き込みに基づいた新垣説に対して、文献上の「異説」も示しておく必要があると考えている。安平と「大西門外」

が開港地として賑わった一九世紀後半、対岸貿易に大きな勢力を持ち、外国商館の請負人（買弁）も兼任した台南商人に沈徳墨がいる。北勢街の彼の邸宅は裏側が仏頭港に面し、ここには波止場もあったらしい。新垣の「廠仔」説が「新港墘の陳」であるのに対し、「北勢街の沈」のプロフィールは作中の「禿頭港の沈」と共通する点が多い。ただし、これも土地資料から見ると疑問がない訳ではない。

本稿では、強いて二者択一の結論を求めるのではなく、なるべく正確な情報によって二つの説の有効性と限界をともに明らかにしておきたいと考えている。恐らく春夫は、両者の要素をそれぞれ作品に取入れたのだろうというのが現在の推測である。

土地資料の所在確認と文献蒐集およびそれらの解説は河野龍也が担当した。一方、「廠仔」陳家子孫へのインタビューは、調査の経緯に精通し、北京語（國語）と閩南語（台湾語）の両方を日常的に駆使する蔡維鋼の寄与があつて初めて可能となったものである。本稿中、蔡はインタビュー録音に基づいて日本語の摘録を作成し、「廠仔」陳家の系図整理も担当した。台南地政事務所における日本時代の土地資料取得をはじめ、実際の調査や討論などで蔡が果たした役割は大きい。報告書を連名とするゆえんである。文責は第二節が蔡維鋼、それ以外は河野龍也である。

二 回想の「廠仔」——陳信子さんの話

新垣宏一が「女誠扇綺譚」の廃屋のモデルと考えた新港墘（五条港の一つ）の陳家造船廠「廠仔」の第九世代にあたる陳信子さんは、

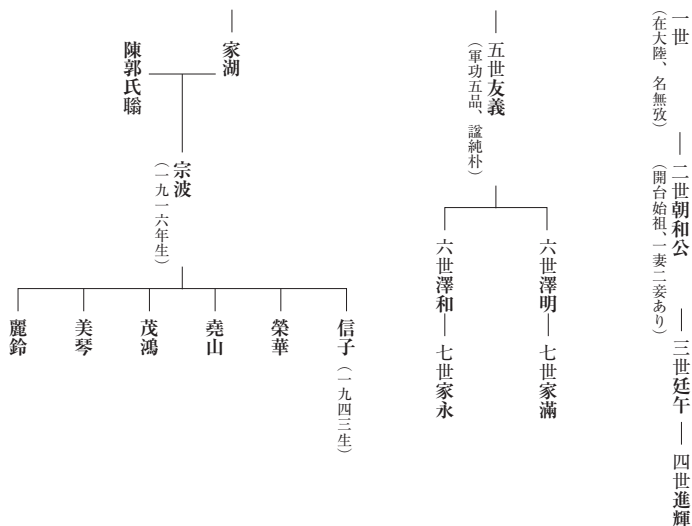
一九四三年生まれで、二〇一六年に満七三歳を迎えた。陳さんは幼い頃、祖母の陳郭氏聯から聞いた先祖の話記憶している。次に掲げるのは、二〇一六年七月二三日、陳さんを訪問して伺った談話の摘録である。また【表1】は談話と文献に基づいて作成した「廠仔」陳家の系図である。

＊

陳家の先祖は対岸福建省の晉江（泉州）から台湾に渡り、造船所と生糸商を営んでいたと言う。また、先祖には官職を得た者があり、かつてはかなりの資産家だったと聞いている。陳家の造船所は俗に「廠仔」と呼ばれ、今の民族路三段一七六巷にあった。そこは五条港の新港境の一番奥にあたるため、「港底」とも称された場所である。以前の「廠仔」は老古石（珊瑚化石）で造った厚い城壁に囲まれている。家財を守り盗賊を防ぐために銃楼も備えて自家の防衛としたものである。この銃楼の脇にこんもりと茂った一本の榕樹があった。しかし、その榕樹が大きく生長して銃楼の眺望を遮ったので、陳家はこれを切り倒すしかなかった。するとその時から陳家の不運が始まった。新造船は進水のたび船底に穴が開き、損失が莫大な額にのぼっていったのである。樹霊の怒りに触れたためだろうというのが家族代々の伝承である。陳信子さんには、物心がついてから一〇代の頃まで、その大木の切り株が庭の一隅に残っていたのを見た記憶がある。だが銃楼の方はその頃もうなかったという。

陳家は「廠仔」の中に大厝（主屋）を建てていた。それは装飾の

表 1



※七世までの系図は『臺南文化』第三卷第四期【西區特輯】(1954年4月)による。家湖(命名の慣例から七世と推定)以降は陳信子さんの談話に基づく。

美を極めた建物だった。袖の建物から三合院の中庭へと出る所に美しい凹型の拱門が、こちらと向こうに二つあった。陳家の冠婚葬祭はすべて大厝で行われ、祖霊を奉祀する行事の際、長机に並ぶ先祖の位牌の中にいつもひときわ大きなものがあった。官職を得た先祖の位牌だろうと信子さんはその時思い、今に至るまで強く印象に焼き付いている。切り倒された榕樹はその大厝の正門のちょうど正面にあたる場所にあった。このことから銃樓の位置も推測できる。

大厝の外、城壁の内には「代天府」という陳家の家廟が建てられた。もとは陳府王爺のほかに呉府王爺と温府王爺を祀っていた。これらの神像は二世の朝和公とともに台湾に渡ってきた呉姓と温姓の開拓者たちのものだった。しかし、陳府王爺と呉府王爺はいつの間にか別の場所に遷され、現在の代天府には温府王爺だけが鎮まり、静かに陳家を見守っている。すでに「廠仔」は細分化され、転売されて、当初の建物では代天府と、「錦興農具廠」所有となった倉庫の一部しか残っていない。この倉庫はちょうど切り倒された榕樹の隣にある。(陳信子さん談)

*

台南市文献委員会の「採訪記」(一九五四年)⁽⁴⁾によれば、「廠仔」は又の名を「南埕廠」と称し、開台始祖の朝和公が創業した。現役時代は台南でもっとも大きい民間造船所の一つで、保安宮附近にあった呉家の「南廠」と合わせて「南北小廠」と言われた。陳家の原籍は福建省泉州府晉江縣南門外十九都圩頭郷だったという。

「採訪記」には一人の「陳家老婦人」へのインタビューが収録されている。家満の妹の子が「五舅母」(母方兄弟の妻の内、五番目)と呼ぶ彼女は、陳信子さんの祖母陳郭氏驍の可能性もある。その「陳家老婦人」の話によると、昔廠仔には三つの「銃樓」があり、それぞれ路口、大厝の後、そして港(新港)の辺りにあったということである。

「採訪記」の記者はまた、陳家の男子は夭折の家系で、次の代との年齢差は二五歳を超えないと仮定し、それから逆算して八代前の朝和公は乾隆初年に生まれ、彼が壮年期になって台湾に渡った頃はおよそ乾隆中葉(一七六〇年代)だろうと推測している。さらに五世友義が軍功五品に列せられたのを、道光一〇(一八三二)年の張丙の乱平定に関わるものと推定している。だが、四世進輝が同治七(一八六八)年に「代天府」に奉納した扁額「神通廣濟」が残っていることから、この推測が疑問視されることは河野龍也が述べている通りである。⁽⁵⁾

信子さんの祖父・家湖には多数の兄弟がいた。兄弟に同じ字を使う台湾の命名法によれば、家満や家永と並ぶ七世と推定される。この代は日本統治時代初期にあたり、造船事業の不振から廃業に至る時期を生きた世代である。その原因は一九世紀前半以来、安平一帯の海底や河床に土砂が堆積し、大型船舶の航行が困難になったこと、南進政策を担った総督府が積極的に高雄港を近代港湾として開発したことにある。官僚体制の整備と行政区再編も相まって、台南は台湾南部都市の首位の座を新興の高雄に譲ることになった。陳家も時

代の浪に吞まれ、家運が傾いていく。八世の宗波は陳信子さんの父親である。二〇一二年に九六歳で他界した。生まれ年を推算すると一九一六年、佐藤春夫が台湾に来たときには四歳だった計算になる。「祖念」が強く、生涯「廠仔」を離れたがらなかったと言ふことである。(蔡記)

三 「廠仔」の再現

一九三七年、台北帝国大学を卒業した高雄生れの文学青年・新垣宏一(一九一三〜二〇〇二)は、卒業後、台南州立台南第二高等女学校の国語教師に赴任する。「女誠扇綺譚」の舞台である台南に久しく憧れを抱いていた新垣は、念願かなって早速春夫の台湾生活に関する研究を開始し、その成果を「台湾文学艸録」(一九三八年)、「仏頭港記―文学的遺跡を尋ねて」(一九三九年)、「女誠扇綺譚」と台南の町」(一九四〇年)⁶⁾に次々と発表した。台湾人の教え子やアシスタントにしながら、放課後と週末を費やした熱心な下町探索の末に、一九三九年、新垣はとうとう「廠仔」を探し当てる。それ以来、「女誠扇綺譚」の「廢屋」は、旧台南市入船町二ノ一六三にあった「廠仔」であることが定説とされてきた。新垣の調査は春夫の訪問からすでに二〇年近い歳月を経過していたが、往時の痕跡や地元の記憶はまだ十分に辿り得る時代だったはずである。

新垣が「廠仔」説の有力な根拠に教えているのが「石垣」と「銃楼」である。まず「石垣」の方は「高さは二米と少しばかり」

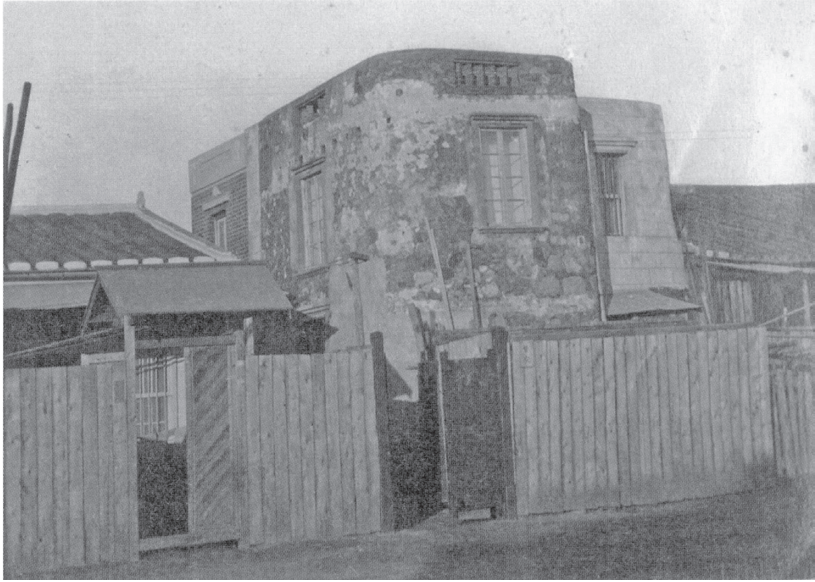
「礎石で築きそれに漆喰を塗つたもの」(地上一米くらゐの高さの

所々に銃眼を塗りつぶした跡)があつて、(「離れて見ると明かに城壁」、それが(「大道路から約五十米以上も奥へ入つてゐ」)たということである(「仏頭港記」)。また「銃楼」の方は、一九四〇年当時、歴史家の石鳴唯(一八九八〜一九六四、台南州台南市立歴史館勤務)が住む二階建の家として現存。間口四間(約七・二M)ほどの普通の家になつていたが、たまたま前嶋信次が一九三三年に撮影したこの家の写真は、石造の前面が円いカーブを描く「銃楼」の特徴をよく残した改造前の姿であつた(図1)。新垣は新旧二枚の写真の記事に添え、(「陳家の邸内にこんな銃楼が三つあつたといふ伝説はあるが、私が子供のときに見たのはこの一つだけ」という石の話も紹介し、(「佐藤春夫の見た銃楼もやはりこれに違ひないと思ふ」と述べている(「女誠扇綺譚」と台南の町」))。

ところで、「女誠扇綺譚」に登場する「廢屋」の主屋の描写は次のようなものである。凸字形の波止場を取り囲むような凹字形の総二階で、正面は五間、左右の出屋は各四間、延坪一五〇坪。淡い紅色の漆喰で化粧した煉瓦壁に空色の細い縁取りがある建物である。港に向かつて間口二間ほどの石段を持つ玄関の左右には大きな水盤が一對、さらに籠の彫刻を施した両側の円柱が並字欄のついた二階の走馬檜を支えている。裏に回ると低い屋根が二三重もつながっており、よく「五落の家」と言われるような形式の大邸宅だった。

「廠仔」にはかつてこのような建物が実際にあつたのだろうか。

新垣の記事中、肝腎の内部の建物に関する検証はあまり詳しくない。一九三九年に新垣が見たときには、西門円環から続く大道路(現民



【図1】「廠仔」南側の「銃楼」（1933年 前嶋信次撮影。黃天橫氏提供）

族路三段）に面して「楠興商行」「大林商行」という二軒の材木商があり、約五〇Mの奥行を持つ「廠仔」の内側へ、約二〇Mにわたって新しい二階建や倉庫を設けていた。新垣は敷地内の古い長屋を訪ねて陳姓の老婆に問いかけるが、現在の佻し気な生活の様子に遠慮してほとんど収穫もなしに帰っている（「仏頭港記」）。その後、石暘睢から陳家祖廟「代天府」の存在を聞き、「陳家永」の表札がかかった二階屋を見ているが、へ全く黒くくすんだ古い建物で二階に走馬楼ともいふべきちよつとした廊が見える。私はこれを見ながら「女誠扇綺譚」の沈家の娘が立つてゐた二階を想つたのである（「女誠扇綺譚」と「台南の町」という簡単な言及しか見えない。建物の大きさにも触れていないのである）。

こうした疑問を解消すべく、今回日本統治時代に作製された「廠仔」の土地登記簿を参照することにした。地番は台南市入船町二丁目一五七〜一六八番地に及ぶ範囲である。一九一九年四月一日の町名変更時に改製されたもので、ほぼ一九二〇年に春夫が台南を訪れた当時の状況と考えてよいものである。実際の謄本には、土地面積（甲数表示）・建物構造・建坪・所有者・抵当権設定などの履歴が記されているが、ここから必要な情報を抜粋してまとめたのが【表2】である。なお、いくつかの地番につき、理由は不明ながら土地登記簿は現存しなかった。ただし、『台南州祠廟名鑑』の記載から、一五八番地には「代天府」があったことが分かっている。場所は現在地と同じである。

この表によると、一九一二年に一括で登録された陳家所有地の総

表2 日本時代「廠仔」土地建物状況(台南市入船町二丁目157番地～168番地)

地番	地目	土地面積(甲/坪)		建物(構造/坪)		登記年代・所有者抄録
157	建物	0.0052	15.26	登記なし		1923.4.5 高祿
158	欠(「代天府」敷地)					
159	建物	0.0092	26.99	①木瓦平	9.40	1914.4.28 吳新竹・吳才
160	建物	0.0138	40.49	②煉瓦平	15.12	1912.12.19 陳柯氏雲・陳清山・陳木・陳家滿・陳家寄・陳家永・陳石・陳賜。
				③煉瓦平	8.91	
161	建物	0.0105	30.81	④煉瓦平	9.00	1912.11.9 何氏春治
162	欠					
163	建物	0.211	619.08	⑤煉瓦平	38.50	1912.12.19 陳柯氏雲・陳清山・陳木・陳家滿・陳家寄。 * 1923.2.17 売却。 * 分割(1923.12.20、163番地より1～10各号を分離)
				⑥煉瓦平	8.00	
				⑦煉瓦平	33.00	
				⑧煉瓦2	18.60	
				⑨煉瓦平	35.75	
				⑩煉瓦平	9.90	
				⑪煉瓦平	9.90	
				⑫煉瓦平	39.00	
				⑬煉瓦平	9.00	
				⑭煉瓦平	9.00	
				⑮煉瓦平	5.00	
				⑯煉瓦平	21.60	
164	欠					
165	建物	0.0578	169.59	登記なし		1915.11.17 黃品。 * 分割(1928.8.28、1931.1.22、1940.11.16)
166	欠(道路敷地)					
167	建物	0.0176	51.64	⑰竹草平	12.25	1907.5.18 吳来。 * 分割(1928.8.28) * 1946.1.28 歐陽錦が購入。
				⑱煉瓦平	11.25	
168	建物	0.0533	156.38	⑲煉瓦平	14.30	1912.12.19 陳柯氏雲・陳清山・陳木・陳家滿・陳家寄・陳家永・陳石・陳賜。 * 分割(1931.6.10、1934.9.12) * 1935.10.8 石陽睢が購入(1944.1.11 売却) * 1947.2.21 歐陽錦が購入。

凡例：木＝木造、煉＝煉瓦造、竹＝竹造、瓦＝瓦葺、草＝草葺、平＝平屋、2＝二階屋。太字が陳家所有地。

面積は約八一六坪。ここに建坪合計約二七六坪の一五棟が登記されている。「廠仔」の全体で言えば、その土地は登記簿が存在するものだけでも一一〇坪以上、登記された建物一九棟の建坪合計は三一七坪に及ぶ。かつてはそのすべてが陳家の所有だったに違いない。次に建物の配置を知るため、台南全域にわたって建造物の輪郭を明らかにした一九〇七年発行の実測図「市区改正台南市街全図」を参照した。これによると、「廠仔」を構成する建物は北側から東側に集中し、西南部が大きく空いていたことが分かる。造船作業場にはこの場所がふさわしい。新垣の取材に答えた地元住民は、〈昔はこの石垣のところを十間くらゐの幅の運河が通つてゐた〉（「ちよつと船溜になるくらゐ邸内に凹字状に引込んでゐた」）（仏頭港記）と言っている。造船場である以上、船溜があったと考える方が自然だが、残念ながら地図の上からそれは読み取れなかった。新垣が見た材木商も、大通りに面して西寄りだというその位置からすれば、この空地を利用して建てられたもので、元々あった陳家の建物を壊して新築したわけではないようである。

さて、この地図に地籍図（一九二〇年代）を重ね、土地登記簿の情報と連動させてみたのが【図2】である。この作業から幾つかの新鮮な事実が浮かび上がってきた。まず、「廠仔」の南側にあったと新垣が紹介した「銃楼」の位置が確定する。土地登記簿によれば、入船町二丁目一六八番地の土地の所有者履歴の中に、一九三五年一〇月八日から一九四四年一月一日まで石陽暉の名が見える。その場所を【図2】によって確かめると、独立した方形の建物が描かれ

ている（1）。「銃楼」の建物と見てよいだろう。

ただし、「銃楼」の眺望を遮つたため切り倒された大榕樹の跡だと陳信子さんが案内してくれた場所は、現在「錦興農具廠」の倉庫になっている現存建物（D）のすぐ裏手で、「廠仔」の中心部にあたり、大通りからは離れている。南側とは別の「銃楼」があったと考えなければ辻褄が合わない。するとやはり【図2】のそれと思しき場所に、方形の建物を見出すことができるのである（2）。「廠



【図2】市区改正台南市街全図（1907）：国立国会図書館蔵地籍図：中央研究院人社中心 GIS 專題中心（2016）。[online] 臺灣百年歷史地圖。 Available at : <http://gisrv4.sinica.edu.tw/gis/twhgis/> [2017.1.13]

「仔」北側の建物後方に描かれた突起(3)も恐らくは同じ意味のものと推測できる。これらは、港側と「大厝」後方にあつたという「銃楼」が当時まだ残つていて、一九〇七年の地図に記録されたものと考えてよいのではないか。「銃楼」はその機能上、地所の辺縁に存在するはずである。しかし、大榕樹に遮られた「銃楼」は「廠仔」の中央部にある。これを「港側」と呼ぶことに照らすと、船溜がこの下まで引き込まれていた傍証になりそうである。

インタビュアー当日、陳信子さんは伝説の大榕樹の跡に立つて振り返り、烈日の下、白く光る北廠金勝宮という廟の側壁を指さして、「あそこに「大厝」の屋根の形が少し残っている。本当に大きくて綺麗な建物だった」と、美しい幻を手繰り寄せるように教えてくれた。その場所の地図には、確かに南を向いて袖を伸ばした三合院のシルエットが描かれている(A)。現在駐車場になつている場所である。二〇一二年の調査時には、この駐車場の東側に古い二階建が存在していた(C)。すつかり屋根が陥没して文字通りの「廢屋」になつていたが、台南特有の古建材である壁鎖(軒下に打ち込んだオランダ式の耐震金具で一九世紀末頃まで使用された)を持ち、老古石を壁材に使つていた。それも取り壊されて存在しない。二〇一六年一〇月現在、「廠仔」の遺構と言える建物は、やはり「壁鎖」を持つ平屋の一棟(D、現「錦興農具廠(倉庫)」と、「代天府」(B)のわずかに二棟を数えるのみになつている。

四 沈徳墨とその家

さて、土地登記簿に「二階屋」は⑧の一棟しか登記されておらず、しかも建坪はわずかに一八・六坪(延坪三七・二坪)に過ぎない。恐らく新垣が見た「陳家永」の家もこれに違いなく、建物の大きさからすると最近壊された二階屋(C)と同じものだろう。ほんの望楼という程度の規模で、東の陸地側の門を監視する機能があつたと思われる。「廠仔」がほぼ平屋を主体とする家屋群だつたとすれば、「廢屋」のモデルは違う家なのだろうか。

実はこの「廢屋」について別の証言が存在している。台南出身の詩人・楊熾昌(一九〇八―一九九四)の「女誠扇綺譚」與禿頭港」(一九八五)¹⁰である。楊はこの文章で、数え一三歳の一九二〇年当時、「台南新報」漢文編輯部で働く父の楊宜緑(号天健)をしばしば訪ねた折に、主任の三屋大寿(正しくは大五郎)から、そこにふらふら出入りする二〇代で眼鏡をかけた瘦せぎすの人を客員身分で働く佐藤春夫だと教えられたと述べている。その後「女誠扇綺譚」を読み、一九二八年九月中旬にモデルとなつた家の二階を訪ねてみると、門や窓は破れ、作中の花嫁が臨終を迎えたという黒檀の寝台もなく、一面の塵埃の中に蜘蛛とヤモリが壁を伝い走っている有様だつたが、凹凸形の銃架や外壁の銃眼があつた。戦後、比較文学者の太田三郎と再訪した折には、二階の廊下にまだ銃眼も確認できたのに、最近文章に書こうとして訪れてみると、道路拡張のため家ももう見つからなかつたと言つている。

楊は端午節の龍船競漕が行われていた頃の「禿頭港」を思い出し、西岸には貿易商や三郊組合（台南の対岸貿易商組合）の倉庫、商店が林立していたことを述べ、港に波止場を持つ二階建の豪邸の痕跡もここにあったように書いている。しかも、終始この家を自然に「沈家」と呼んでいる。具体的な描写には乏しいが、楊が「禿頭港の沈」の实在をそのまま前提としてこの文章を書いていることは明らかである。調べてみると、「禿頭港」（仏頭港）南岸の北勢街（現神農街）には、確かに沈姓を持つ対岸貿易の豪商が存在した。歴史家連横（号雅堂・一八七八〜一九三六）の岳父にあたる沈徳墨という人物である。

連横の『臺灣通史』下巻（卷三五）「貨殖列傳」（一九二〇¹³）によれば、沈徳墨（号鴻傑・一八三七〜一九〇六）は泉州安溪の人。父に随い一三歳で廈門に商業を学び、やや長じて航海術を習得、東洋南洋と幅広い取引を持ち、行く先々で言葉を学んだ。渡航先は日本・ベトナム・シヤム・ジャワ・ルソン・シンガポールからウラジオストクに及んだという。台湾の茶と砂糖を天津・上海に融通して利益を上げ、一八六六年台南に定居。英語を駆使してイギリス商人と商社を経営したほか、ドイツ商人と共同で輸入品を台湾南北に売り、台湾商品を西洋に輸出。紐西蘭海上保険代理店の開店は台南保険業の嚆矢であった。またドイツの機械を導入して新営荘で製糖業を試みたほか、霧峰の林朝棟との齟齬や官の統制による困難を冒して集集で樟腦生産に努める多角的な経営者ぶりだったが、晩年はやや事業不振に傾いたという（図3）。

さて、その台南の家については興味深い事実がある。明治期の旧台湾総督府文書の中に、この家の土地と建物を登記する際のトラブルに対応した台湾総督府外事課と台南庁の往復書簡が二束保存されているのである¹⁴。事の起りは一九〇〇年、大陸汕頭に本部を持つ独商ラウツ・ウント・ヘースロープ商会（Lauts & Haesloop 以下L & H）が、台湾での営業時代に使用した台南市街北勢街二一番戸の土地の所有権を、台湾に不在のまま駐淡水ドイツ領事を通じて申し立てたところから始まる。L & Hと領事は、領事館備付の財産台帳と権利書を根拠に強硬な姿勢を見せていたが、総督府外事課はそもそもドイツ人の清国領内における土地所有自体が独清通商条約違反であり、日本も同様に外国人の国内土地所有を禁じていることを



【図3】沈徳墨（『臺灣通史』）
國立臺灣圖書館提供

説明して、一九〇一年、土地の官有地化とL&Hへの永代借地権附与で合意に至る。ところが翌年、今度は建物の登記をめぐって、現在の住人沈徳墨が抵当権を主張し、L&Hと対立するということが起っているのである。台南庁は沈を非所有の管理者とする確認書に両者の署名を求めるが、双方から拒否され事態の泥沼化を招いた。結局、臨時台湾土地調査局による全島土地調査が行われた際、所有者をL&Hとする台南地方法院の決定書を台南庁から土地調査局に提出、沈徳墨も自己の購入物件であることを届け出ていたが、調査簿の公開中に異議申立てを行わなかったことを理由として、なかば強引にL&Hの所有を確定し、一九〇四年、その旨をドイツ領事に通知して幕を引いた。

沈徳墨が所有権を主張するために臨時台湾土地調査局に提出した書類は、外国商会とその受託販売人(買弁)との独特な提携関係を示すものとして官の眼を惹いたらしく、『台湾糖業旧慣一斑』⁽¹⁵⁾にその書類一式がまとめて掲載されている。そのうちの「理由書」(第五九七)によれば、一八八四年、台南南河街に阿片・砂糖商「瑞興洋行」を設立した沈徳墨は、翌年五月、同商号をL&Hに提供して樟腦販売の「買弁」に就任。その際、この北勢街の家を一七〇〇円(メキシコ銀)で陳成・陳旺・陳根の三者から購入し、封印のまま担保としてL&Hに納めた。沈は合弁中、L&Hに合計一万五〇〇〇円程の貸付を行ったが、一八八九年二月にL&Hが台湾から事業撤退した折にも貸付金の清算は行われず、合弁の停止後返却される約束の土地家屋の権利書も油頭に持ち去られてしまったという。

台南庁が総督府民政長官への報告書で、(ヘスロブハ従来右家屋ヲ以テ借金ノ抵当タルカ如ク思意シ家税等ハ沈徳墨ヘ義務ヲ負ハセテリ依テ同人モ亦之ヲ甘シ今日ニ至レリ)(一九〇二年五月八日)と述べているように、沈一家はこの家を、L&Hからの事実上の担保として居宅に使用していたのが実情のようだ。

沈の主張を事実とすれば、彼は自己資本で買い取り、本来なら返してもらえないはずの土地と家を、相手から与えられた抵当として使用し続けるという奇妙な形でここに住んでいたために、結局は官と外国商会にみすみす所有権を奪われる形になってしまったことになる。沈の無念さはいかばかりであったろうか。その後も沈家はここに住み続けたが、第一次世界大戦後、その家屋は「敵国人財産」と見做され、財産解除の対象とされてしまう。一九二三年七月、この家の清算額一〇四七円六〇銭は沈家に対してではなく、外務省からドイツ大使を通じ、元「所有者」のヘスロブへと送金された。⁽¹⁶⁾

五 開港地としての「大西門外」

さて、いま問題にしたいのは、「北勢街の沈家」の正確な場所と邸宅の規模である。総督府文書の住所は(北勢街二十一番戸)、一方『台湾糖業旧慣一斑』の方は(北勢街十八番戸)とあつて一致しない。しかし、一九〇九年九月一日の台南庁告示第九四号には、庁内永代借地の一つとして、国庫所有「台南市庚一〇三三番地」の建物敷地〇・〇六〇四甲(一七七・二二坪)を、仏銀二千員の借地料支払済として、(在清国油頭 独乙国 ラウツ、ウンド、ヘース

ロップ（瑞興洋行）に（無期限ニシテ且ツ無条件）で認める旨の告示が見える。これは一九一九年町名改正後の「台南市永楽町二丁目一三六番地」に相当する場所である。

早速この場所の土地台帳と土地登記簿、地籍図を取得した。その情報を総合してみると、最初この地所は国庫所有、一九〇六年二月一〇日に台南庁から台湾総督へと管理更生、一九〇九年九月一日に清国汕頭独乙国人ラウツ、ウンド、ヘースロップ（瑞興洋行）を永代借地権者として登記している。その後、一九二三年一月三〇日に黄戊巳が取得、それを一九二六年一月八日、黄欣・黄漢泉に売却。さらに一九二九年七月八日、黄漢泉持分が黄欣に売却された。黄欣と黄漢泉はそれぞれ作家黄靈芝・歴史家黄天横の父に当たたる台南東門の資産家で、その邸宅「固園」は漢詩結社「南社」の活動拠点として台南随一の文化サロンであった。

一方、建物については『台湾糖業旧慣一斑』に収録された典契（第五九ノ二）にやや詳しい記述がある。

北勢街北畔、瓦厝両宗、前後相通、前壺座、参進、式埕、一爐下、並樓二個、一水井、東至朱家宅、南至街路、北至本家宅、後四坎三落、東至施家宅、西至王家宅、南至本家宅、北至仏頭港止、另有買過水井一口、前後門窓戸扇俱各齊備、前手四至亦俱備明上手契内：（北勢街北側の瓦葺建物二軒で前後つながったもの。前面は三棟、中庭二、竈一、附属の楼閣二、井戸一。東は朱家の邸、南は街路、北は自邸まで。後面は四軒分の幅を持つ三棟で、東は施家の邸、西は王家の邸、南は自邸、北は仏

頭港まで。別に井戸一を購入。前後とも門窓戸扉すべて備わり、所有者の履歴と面積は「上手契」（土地家屋と共に持ち伝えられる売買契約書の束で権利書に相当）に明記されている。）

同書収録の別文書（第五九ノ七）には〈家屋乙座、計五棟〉とあり、文中の（本家宅）は前後にまたがる同じ棟を二度数えていることが分かる。総督府文書中の台南庁報告（一九〇一年八月一〇日）にも、〈前面約二間半（約四・五M）後面約五間（約九M）建家五棟有之〉と見え、これも参考になる。さらに、沈德墨の曾孫にあたる作家の林文月は、祖父連横の伝記『青山青史―連雅堂傳』の中で、祖母の実家を次のように紹介している。

由於瑞興洋行内部債務關係、合夥的德國商人無力償債、便留下
一幢坐落於北勢街的洋房而返回德國。從之、沈氏繼續獨立經營
「瑞興洋行」、而沈家的人也就遷居於那幢當時最豪華摩登的洋房
裡。這一幢二層樓的洋房有五進深、樓下後面大部分供做倉庫、
存放著準備裝船的貨品。（瑞興洋行内部の債務のため共同事業
者のドイツ商人は返済能力がなく、北勢街に位置する洋館を残
してドイツに帰国した。それから沈氏は「瑞興洋行」の経営を
単独で継続し、沈一家もほどなく当時最も豪華でモダンだった
その洋館の中に転居したのである。この洋館は二階建て五進
（縦に並んだ五棟）の興行があり、一階部分の後面は大部分倉
庫に充て、装船具が保管されていた。）

一八九七年、德墨の娘沈敷（号筱雲）は二四歳で二〇歳の連横に嫁した。偶々連の家にペスト患者が出たため、二人は北勢街の沈家

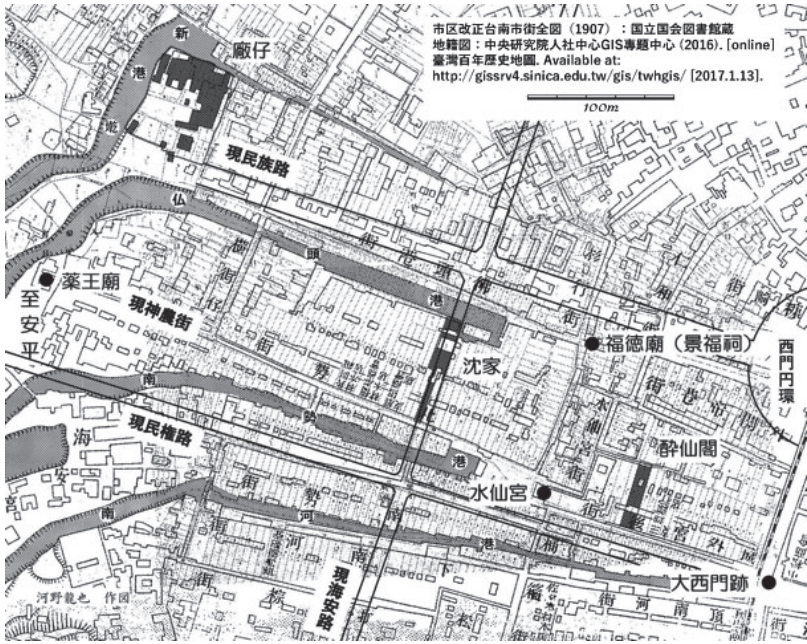
に避難して新婚生活を送り、翌年ここで長女の連夏旬が誕生する。「青山青史」の多くは夏旬の思い出に拠ると言い、その生家の描写も十分信憑性が高い。二階建て五進（五落）、豪華でモダンな洋館、仏頭港に面した倉庫、そこに仕舞ってあった装船具、家の主は有能な貿易商——どれを取っても「港」の華やかな時代を昔語りに語る「女誠扇綺譚」の「廢屋」そっくりの道具立てと言えよう。

案外見過ごされて来たのが「走馬楼」という中国南方に特有の建築用語である。これは二階以上の建物周囲を回廊式のベランダが巡っている形式のもので、風が吹き抜けて涼しい。特に「女誠扇綺譚」の場合は壁に化粧煉瓦を使っている所から、中西折衷で並んだアーチの曲線が美しいわゆる「ペランダ・コロニアル様式」の瀟洒な洋館を思わせる。一八六〇年、天津条約の発効で開港地となった安平には、イギリス・ドイツの商館が続々と進出し、台湾から砂糖と樟脳を輸出、逆に台湾には阿片と雑貨を持ち込む取引で大きな収益を上げて行った。その物流の大動脈を担ったのが五本に分かれた運河で、「大西門外」はその荷捌場として発達し、外国商館の多くがここにも出張所を持ったのである。こうした開港地のハイカラな雰囲気は、「懐かしさ」を売り物にした現在の台南西部からは想像もつかない。だが、日本の領台初期、安平と「大西門外」が一括して外国人雑居地に指定されていた事実を看過してはなるまい。

これらの外国商人は、取引を円滑にするため地元の習慣に通じた現地の商人を「買弁」として雇い商品販売を委託するのが一般的であった。一方「買弁」にも、各種の外国権益を自分の商売に利用で

きるメリットがあり、両者の間には、互いをしたたかに利用しながら商売を大きくしていく共存関係が存在していた。しかし、彼らの取扱品がやがて総督府の資金源として統制されるようになると、利益を上げられなくなった外国商館は豪華な空屋を残して撤退して行った。現在安平には英商徳記洋行・独商東興洋行の二棟の外国商館が保存されているが、春夫来南の当時は「大西門外」の側にもこれに似た荷捌場の遺構があったはずである。作品の舞台を「北勢街の沈家」に設定してみると、アジアの海域を広く股にかけた沈徳墨の活躍と共に、開港地としての「大西門外」の風貌がにわかに立体感を増してくる。⁽¹⁹⁾

だが、地籍図に基づいて一九〇七年の実測図から該当地番上の建物の形状を切出してみると、やはり疑問が湧いて来ない訳ではない（図4）。第一に、〈延坪一五〇坪〉で総二階ならば建坪七五坪を意味し、それが五棟の内の一棟であれば、すべての建物を容れるのに少なくとも三〇〇坪は建坪が必要になる。だが、実際の地所は総面積一八〇坪に満たず、周囲にも家が建て込み過ぎているのである。第二に、古地図で船溜が確認できないこと。【図4】を見る限り凹形の建物がありそうにない。第三に、敷地内に銃楼の存在が確認できないこと。そもそも町中にあり、二階建て眺望の利く建物に銃楼が必要だったのかどうか。そして第四に、春夫の台南訪問当時、ここは無住の「廢墟」ではなかった。外務省外交史料館保管の「外国旅券下附表」（台南庁）によれば、一九二〇年八月二四日に沈清根が商業視察のため汕頭・廈門・福州・上海への旅券を取得、ま



【図4】北勢街「沈家」中心図 地籍図上に1907年の建物図と20～30年代の開通道路を重ねたもの。

たその兄で戸主の沈清良が九月一四日に親族訪問のためジャワへの旅券を取得している。申請時の両者の現住所は「永楽町二丁目一三六番地」である。

こうして見ると、「銃楼」を確実に備え、城郭のような一画を構成していた「廠仔」説には依然として説得力がある。「廠仔」と「北勢街の沈家」の距離は歩いて一〇分弱、「北勢街の沈家」と「醉仙閣」も歩いて二・三分の至近距離にあり、春夫が仏頭港の北側を散策したのであれば、そのすべてはごく自然に目に映ったはずなのである。恐らく、建物の周囲や「銃楼」は「廠仔」に基づき、場所や主屋は「北勢街の沈家」や安平の洋館を参考にしたというのが、現段階では最も妥当な想定であるように思われる。

最後に、「北勢街の沈家」がその後どうなったか、気が進まぬながら述べておかななくてはならない。土地登記簿によれば、この場所は一九三七年三月三一日に分割され、元の面積〇・〇六〇四甲（一七七・二二坪）が〇・〇二一九甲（六四・二六坪）にまで削られた。そして分離された土地は、同年五月一四日に黄欣から台南市へと所有権移転され、道路用地になったのである。したがって、一九三九年に旧仏頭港の一角をあれほど歩き廻った新垣宏一は、この家の完全な姿を目にすることができなかった。水仙宮前から北に福徳廟（景福祠）へと進み、そのT字路を西に葉王廟の方面へと進んでいった時である。古色豊かな狹巷を楽しんでいた新垣の目の前に急に十字路が現れる。へ此十字路は最近に作られた道らしく、真新しくとりくづされた家が、その削り取ら

れた壁面を見せてゐる) (「仏頭港記」)。狹巷の続きを辿ろうと十字路を渡る瞬間の新垣に、まさにその削られた家こそ沈家の邸だった、と伝えたら、さぞ驚き落胆したことだろう。あと二年この家が長く完全な形を地上に保っていたなら、新垣の報告は現在見るのとまた違った形になっていたのだろうか。²⁰⁾

楊熾昌が太田三郎と再訪したという家がここだとすれば、一九三七年に地所の半分以上を道路に削られたこの家は、戦後も辛うじてまだその一部を保っていたことになる。だが、二〇一六年現在、景福祠の華表とらひから外に出て道を渡り、この場所に立った人の目に映るのは、道幅を三倍近くに拡げた「海安路」のど真ん中にある、中央分離帯を兼ねた殺風景な駐車場である。老いた沈徳墨が必死に守ろうとした北勢街の家の痕跡などはやどこに探す手がかりもない。すべては一場の夢に似て、歴史の彼方に遠のいてしまったのである。

附記 引用中、日本語文献には常用漢字を使用しました。本稿はJSPS科研費26770086の助成を受けた成果の一部です。

謝辞 今回の現地調査で快く取材をお引受けくださった陳信子さんのご厚意と親切なお心遣いは永く忘れたいものです。この出会いは天理大学・下村作次郎氏、国立台湾文学館・陳慕貞氏の事前調査があつて初めて実現しました。また新垣宏一の完全な探索記事をご提供くださった謝惠貞氏、和泉司氏、各種資料をご提供くださった国立台湾図書館、中央研究院、台南市地政事務所、国立国会図書館、

土地契約文書の解説についてご教示くださった恩田重直氏、以上の各位に厚く御礼申し上げます。

前嶋信次撮影の「銃樓」写真を見出したのは、故黄天横先生にご恵送いただいたご著書によるもので、画像の使用も快くお認めくださいました。黄先生は二〇一六年四月七日、不帰の客となられ、再会の機を得られなかったことをひたすら残念に思います。

感謝とともに本稿を黄先生に捧げ、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

註1 河野龍也「佐藤春夫の台湾滞在に関する新事実(二)——土地資料を活用した台南関連遺跡の調査」(『實踐國文學』二〇一六・一〇)に詳述した。なお、「北勢街の沈家」に関しては、この論文で概略に触れたものを資料に基づき本稿で詳述するものである。

2 中島新一郎「地番入台南市地図」(一九三三・一二、竹中商行・橋本商店)。

3 河野龍也「消えない足あとを求めて——台南醉仙閣の佐藤春夫」(『實踐國文學』二〇一・一〇)、同「佐藤春夫「女誠扇綺譚」と港の記憶——再説・禿頭庵と醉仙閣」(『実践女子大学文芸資料研究所年報』二〇一三・三)、同編「佐藤春夫読本」(二〇一五・一〇、勉誠出版)で「廠仔」説とその現地調査を報告した。

4 臺南市文獻委員會編纂組「採訪記」(『臺南文化』一九五四・四)。

5 河野龍也「佐藤春夫「女誠扇綺譚」と港の記憶」(註3)。

6 新垣宏一「台湾文学の歩み」(十七)、「(二〇) 佐藤春夫のこと」(『台湾日報』一九三八・一一・一)、「一六」「仏頭港記——文学的遺跡を尋ねて」(六回)『台湾日報』一九三九・六・一三〜一四、「女誠扇綺譚」と台南の町(二)、「(六)」「台湾日報』一九四〇・四・某〜五・七。これらのダイジェストに「女誠扇綺譚」——断想ひとつふたつ」(『文芸台湾』一九四

- ・七)がある。
- 7 前嶋振影のオリジナルプリントが、黄天横・吳毓琪(林佩蓉・柯榮三編)『固園文學史暨石陽庵度藏史料圖錄選』(二〇一四・一一、國立臺灣文學館)に「新港坵銃樓」として収録されている。写真は石陽庵から台南歴史家の黄天横に継承されていたのである。
- 8 相良吉哉編『台南州祠廟名鑑』(一九三三・一二、嘉邑城隍廟附設慈善會)。
- 9 「市区改正台南市街全図」(一九〇七・七、財藤勝)。
- 10 楊熾昌『女誠扇綺譚』與禿頭港一赤嵌時代取材臺南的故事」(『台南文化』一九八五・六)。楊がこの文章で、主屋に銃架や銃眼があるように書いているのは春夫の原作と異なる。
- 11 新垣宏一は「台湾文学紳録」で、当時から言われた春夫の『台南新報』記者説を、小説と事実を混同した(滑稽なりアリスト)の説と一蹴している。島田謹二(松風子)は『女誠扇綺譚』の話者について(『文芸台湾』一九四〇・一〇)で同様の立場を示しながら、寄稿を依頼された事実はあるという春夫自身の直話を紹介している。
- 12 太田三郎(一九〇九〜一九七六)「佐藤春夫『女誠扇綺譚』の舞台」(『群像』一九七一・三)には南管(中国南方伝統音楽 研究家の許丙丁(一九九九〜一九七七)の案内で神農路(旧北勢街・現神農街)を歩いたことが出てくるに過ぎない。
- 13 連橫(雅堂)『臺灣通史』下巻(一九二一・四、臺灣通史社)。
- 14 「臺南市内ニ於テ獨商ラツツ、ウンド、ベスロツツ商會カ占有スル土地ニ關スル件」『臺灣總督府公文類纂』國史館臺灣文獻館藏、典藏號・00000628005 および「臺南北勢街家屋ラウス、ウンド、ヘース、ロープ登記ニ關スル件」『臺灣總督府公文類纂』同、典藏號・0000480001。
- 15 臨時台湾旧慣調査会『台湾糖業旧慣一斑』(一九〇九・一一、臨時台湾旧慣調査会)。
- 16 J A C A R (アジア歴史資料センター) Ref. B07091115600 (第一画像目から)、敵国人及第三国人財産/独欧州戦争関係敵国財産管理一件管理財産解除、個人ノ部、第八卷(52.13)(外務省外交史料館)。
- 17 『台南府報』第五五九号(一九〇九・九・二)。
- 18 林文月『青山青史—連雅堂傳』(二〇一〇・八、有鹿文化。元版一九七〇)。
- 19 連橫は一八九九年、『台南新報』前身の『台澎日報』記者就任以来、一九一九年まで断続的に長く台南新報社に勤めており、楊熾昌が言うように春夫が『台南新報』の人脈と接点を持っていたとすれば、連の岳父沈徳墨やその家について社員から教えられた可能性は十分にあり得る。ただし、新垣はその後のこの附近でかなり綿密な聞き取りを行っている。またその文章には『臺灣通史』も登場する。それでも沈家の話題が登場しないのはやや不可解である。また楊熾昌が訪問したのがこの家だとすると、戦後も一部残存した建物に、戦前の調査で新垣が目撃しなかったのは少々不審である。地所の狭い沈家の邸宅が「廠仔」ほど作品の舞台に似ていなかったことも考え得る。

追記 最近、『帝國旅人佐藤春夫行脚臺灣』(二〇一六・一一、紅通通文化出版社)という『女誠扇綺譚』の中文訳と地元在住者の文学案内を収録した本が台湾で刊行された。一九三九年に新垣も見た近代建築の「吳氏別墅」(のちの林叔桓別墅「礪園」)を「沈家」と説明するほか、「醉仙閣」の場所や「廠仔」陳家についても誤解が多い。裏付けを経ない情報が台南発の地元の説として活字になり、流布されるのは憂慮に堪えない。日本統治時代の都市や生活の記憶の風化は思った以上に深刻である。当時の記録のほとんどが日本語資料である点が、記憶の回復に困難をもたらしていることは確かだ。研究者の交流がこの困難を乗り越える力になることを願う。また誤解が生まれる原因には常に敏感かつ謙虚でありたいと思う。

二〇一七・一、一三、台北にて、河野龍也記

(この・たつや 実践女子大学文学部准教授・本学非常勤講師)
(さい・うえいかん 平成二十四年度大学院博士後期課程単位取得退学)